

読者のみなさんへのよびかけ

「特に、初めて筆者の著作に接するかたがたへ」

本書の趣旨を理解していただくために、『更級日記』からひとつの例を取りあげてみます。

京の文化が及ばない東国の片隅に育った少女が、親族の女性たちの雑談を聞いて、いろいろの物語があることを知りました、なかでも、光源氏の話に興味をそそられ、京に行つて物語が読みたくてたまらなくなり、それを実現するために行動を起こします。

等身とうしんに薬師やくし仏ぼつを造りて、手洗あらいひなどして、人間ひとまにみそかに入りつゝ、京に疾とく上げ給ひて、物語の多く候さぶらふなる、ある限り見せ給へと、身を捨なて、額ぬかをつき祈り申すほどに、

薬師にやうし如来の像を自分の背丈ぐらいに造り、身を清めて人目のないときにこっそりと籠もつて、わたくしを京に上らせて、たくさんあると聞いております物語を、ありつだけ読ませてくださいますようにと必死にお祈りをした、というような意味であることは、古語辞典でも引けばだいたい理解できますから、古文解釈の作業はひとまずメドが付きます。なぜなら、古文解釈とは、古文を現代日本語に置き換えることだという共通理解が確立されているから

です。しかし、こんなことで、古典文学作品の表現を理解したことにはなりません。

この少女は、どんな材料で薬師仏を造ったのでしょうか。金銅こんどう仏や石仏はもとより、木彫でも、身の丈ほどもある仏像をひとりで造り、どこかに隠して、ひそかにお祈りをしていたなどということが、ありえたでしょうか、この部分はフィクションだ、などという逃げ口上は、あまりに不自然な話にまでは通用しません。

ほかの注釈書が表面的な古文解釈のレヴェルでしか考えていないなかに、ひとつの注釈書は、「薬師如来の等身像を造ってもらい」と訳しています〔新編日本古典文学全集〕。自分で造れるはずがないという判断はそのとおりなのですが、信仰の対象である尊い仏像の制作を、女の子が秘密で仏師に依頼して、そのまま隠しとおすことが許されたとは考えられません。

そのあと、上京の望みが叶って門出をする場面には、つぎのように記されています。

年ごろ遊び慣れつる所をあらはに毀こぼち散らして、立ち騒ぎて、日の入り  
際さきの、すごく霧きりりわたりたるに、車に乗るとて、うち見やりたれば、人ひと間  
には参りつ、額ぬかをつきし薬師仏の立ち給へるを見捨て奉る、悲しくて、人  
知れず、うち泣かれぬ

住んでいた屋敷の家具や調度を乱暴に片付けて奥まで丸見えになったなかに、尊い仏像がポツンと置き去りになっているのを、家族や周囲の人たちが傍観しているはずがないではあ

りませんか。

「等身に薬師仏を造りて」という表現を、筆者はつぎのように解釈します。

この少女は、人目に付かずに出入りできる秘密のコーナーを見つけて薬師仏を安置しました。ただし、自分の手で制作したわけでもないし、だれかに依頼したわけでもありません。そこに薬師仏がおわしますつもりになって、こっそりと籠もっては、早く上京させて物語を読ませてくださいと、薬師仏に礼拝して熱心にお願いしつづけたのです。それでこそ、物語の世界に生きる夢多き少女らしい無邪気な行動ではありませんか。ずっとあの場所におはしまして願ひ事を聞いてくださった幻の薬師如来像とお別れするのがつらくて、人知れず泣けてきたということです。

もうひとつ、「薬師仏を造りて」という表現には、説明を要する大切な事柄があります。それは、阿弥陀仏、釈迦牟尼仏、観世音菩薩、地藏菩薩と、御利益あらたかな尊い仏がたくさんあるなかから、どうして彼女が薬師仏を選んだのかということです。

京にたどり着いて夢を果たすまでに、どのような災難に遭うかわかりません。万一のことが起これば、世にあるかぎりの物語を読み尽くそうという悲願は果たせません。ずっと健康でいるために、大医王仏という別名をもつ薬師如来におすがりしたのです。

この事例をここに持ち出したのは、古文教材の定番になっていく文章でさえ、隅々までは解釈が及んでいないのが実情であることを、本書の内容を読むまえに実例に即して認識してほしかったからなのです。見過ごしやすいひとつの表現のなかに、これまでだれも気づいていなかったと思われる大切な問題を掘り起こし、適切な解釈を与えたことよって、多感な少女にふさわしい、無邪気な情動と行動とを浮き彫りにしてこの表現に血をかよわせ、すべての読者が、時間の隔たりを超えて親しみをおぼえることができるようになりました。

「葉師仏を造りて」と同じような、改めて指摘されれば、なるほどおかしいと気づく事例が、名作のなかの名文と評価されている箇所にも少なくありません。そういうところに気づくためには、古典文法の知識などよりも、日本語話者の鋭敏かつ繊細な言語感覚を磨き、場面のなかに身を置いて読むことです。

本書には、というより、本書にもまた、事実上の定説として確立されている解釈を真つ向から否定する事例がときおり出てきますが、筆者は、これまでと同様、Scrap and buildで、見かけ倒しの建物を壊したあとに、もつと堅牢な建造物を建てたつもりです。もとより、文献研究の徒としての責任の重さは自覚しているつもりです。

本書で検討の対象に選んだ『伊勢物語』は、長年の風雪に耐えて生き残ってきた文学作品です。我々の心を豊かにすることが文学作品の存在理由レゾンデートルであるとしたり、本書のようなアプ

ローチもまた、文学作品をエンジョイするひとつのありかただと信じています。

叩けよ、さらば開かれむ、という積極的姿勢で読んでくださるみなさんの意欲に応えるために、本書でも、できる限り砕いて表現するように心掛けます。

